

## 山東京伝の読本における〈通俗本〉の利用と変化

—『通俗醉菩提全伝』を例に—

小林 俊輝

### 一、序

十八世紀末から十九世紀にかけて成立・発展した近世の長編文学（後期読本）には、〈通俗本〉からの影響を多く見ることができる。〈通俗本〉とは、中国の白話小説『水滸伝』や『濟顛大師醉菩提全伝』を訓読したものである。（後期読本）では、こうした〈通俗本〉を始めとした諸典拠から短編が取り出され、それらが作中の何らかの因果関係で結び付けられることで一つの長編物語となることが多い。そのため、〈通俗本〉は（後期読本）の成立と展開を捉える上で、重要な立ち位置にある文学ジャンルと言える。

本稿では、こうした〈通俗本〉の中から『通俗醉菩提全伝』（五巻五冊、三宅嘯山訳、宝暦九年（一七五九）、京都西村平八刊）を取り上げる。この作品は、寛政十一（一七九九）年に『忠臣水滸伝』を執筆して（後期読本）の先駆けとなった山東京伝が、全十作品ある自身

山東京伝の読本における〈通俗本〉の利用と変化（小林）

の読本の中で度々利用している点で目を引く。

本作は、清の天花藏主人述『濟顛大師醉菩提全伝』二十回の翻訳で、風狂僧道濟の一生の行状を描いたものである。京伝読本で〈通俗本〉から用いられた典拠の多くは先行研究で明かされており、<sup>1)</sup>『通俗醉菩提全伝』からは四作目『桜姫全伝 曙草紙』（文化二（一八〇五）年）と九作目の『本朝醉菩提全伝』（文化六（一八〇九）年）に指摘がある。それに加えて、今回の調査の中で、二作目『復讐奇談 安積沼』（淳和三（一八〇三）年）にも利用の痕跡が見られることを新たに確認した。

そして、『安積沼』を加えた三作を比較すると、いずれも『通俗醉菩提全伝』の巻五上「宣教秀玉雙憐花」が共通して用いられていること、さらにその利用方法と作中における立ち位置がそれぞれの作品で大きく異なっていることが分かる。

初期作品の『安積沼』では、『通俗醉菩提全伝』の一編を分割し、

その間に複数の小話を加えることで全体の長編性を獲得しようとする、いわば〈通俗本〉を介して、成立の途上にあつた〈後期読本〉の型を模索する試験的な利用がなされていた。そして、そこで生じた失敗を踏まえ、京伝は三作目『優曇華物語』（文化元（一八〇四）年）で読本における長編物語構造を確立する。この時期の作品からは、〈通俗本〉の話を借用して物語の大枠とし、その内側に他の話を加えることで長編化を試みようとした様子を窺うことができる。

しかし、読本の様式が整つた後に出された四作目『曙草紙』での〈通俗本〉の利用は、登場人物の造形描写や漢詩の引用が主となり、全体に対して占める挿話の比重が減少する。以降の京伝読本でも同様に、文言の借用はあるものの、〈通俗本〉由来の目立つた挿話は見られなくなる。この時期から京伝は、漢籍由来の話から、主に本朝由来の話を読本の中に用いるようになり、〈通俗本〉と距離を取る段階へ移つたと考えられる。

その後に出された九作目『本朝醉菩提全伝』は一転して、その名が示す通り『通俗醉菩提全伝』を強く意識した作品となつた。本作は、『通俗醉菩提全伝』の道濟を本朝の一人に仮託し、作中様々な事件の解決に当たらせるものである。しかし、題名に冠していながらも、本作の中で『通俗醉菩提全伝』からの直接の挿話は見られない。本作では、一人の高僧が作中の複数の小話の中で発生する事件を解決するという、物語の〈枠組み〉の転用がなされていた。

と言うのも、『通俗醉菩提全伝』はそれぞれの小話と小話の間に繋

がりがない一話完結の短編形式を取っており、長編物語構造の求められる〈後期読本〉にその枠組みをそのまま用いることはできない。そこで京伝は後述するように、道濟にあたる一人の人物造形とその役割を読本に合わせて改変することで、本朝の「醉菩提全伝」として長編化することに成功した。この時期の京伝読本では、初期とは対照的に、〈通俗本〉の枠組みを読本の中に落とし込もうとする試みが見られる。

このように、『通俗醉菩提全伝』の影響が見られる三作品を比較することで、〈通俗本〉から話を借りて翻案する形で始まつた〈後期読本〉が、山東京伝の場合には、次第に距離を取るようにして新しい文芸様式として成熟していく過程を捉えることができる。これは同時代に〈後期読本〉を主導したもう一人の作家、曲亭馬琴が漢籍由来の話を好んで用いた姿勢とは対照的であり、京伝の〈通俗本〉に対する利用法を検証することは、両者の差異を捉える上でも意義があると考えられる。

そのため本稿では、〈後期読本〉の中から山東京伝の読本に主眼を置き、彼が〈通俗本〉をどのように受容し、またその利用形態を変遷させていったのか究明することを目的とする。

## 二、『復讐奇談 安積沼』における利用

まず、京伝読本の一作目『忠臣水滸伝』は、徳田武氏が指摘するように〈通俗本〉の『通俗忠義水滸伝』（宝暦七（一七五七）年—

寛政二（一七九〇）年」と、我が国の『仮名手本忠臣蔵』（寛延元（一七四八）年）を下敷きに翻案した作品である。<sup>(2)</sup> また大高洋司氏は、「長編構成を支える枠組みとしては浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』全十一段をほぼそのままに生かしながら、文体は、通俗本に用いられる中国白話文翻訳調で全体を統一した」とし、「文体の問題」として、後編では緩和されるものの、前編では漢文体に寄せられていることから、〈通俗本〉の影響を顕著にみることができると指摘している。<sup>(3)</sup>

続く二作目『安積沼』では、大高氏が『忠臣水滸伝』後編よりもさらに一層なだらかなものに落ちつく<sup>(4)</sup>と文体を分析しているように、後の主流となる和文体が見られるようになる。それと併せて、本作では、作中の挿話の中に〈通俗本〉の一節をもとに翻案したとされる箇所がある。先行研究では、徳田武氏が第五条の布を用いて密通を重ねる場面と、女性が悪僧に強殺される話が、『竜図公案』の抄訳たる『通俗孝肅伝』（明和七（一七七〇）年刊）二「阿弥陀仏講和」に拠ると指摘している。<sup>(5)</sup> 『安積沼』で該当する第五、第六条の梗概は以下の通りである。

敵討ちの旅に出た主人公山井波門は、狭布里に宿泊中に隣家の娘お秋と恋に落ちる。波門は、文鎮に結んだ手紙で歌を介したやりとりを重ねた後、家へ忍び込み密会を果たす。その後、お秋は悪僧の現西によつて強殺され、彼女に思いを寄せていた村のならず者藤六の讒言から嫌疑が密通相手の波門にかかる。その後、知県の機転で役者の小鱈小平次が扮する偽幽霊の協力もあり、波門は

山東京伝の読本における〈通俗本〉の利用と変化（小林）

釈放される。しかし、その帰路に藤六と仲間たちに逆恨みから襲撃を受け、返り討ちにして狭布の里を後にする。

太字と一重傍線を施した箇所は、前述した先行研究での『通俗孝肅伝』の該当箇所である。

それに加えて、本作では『通俗孝肅伝』だけでなく、『通俗醉菩提全伝』の巻五上「宣教秀玉雙憐花」からの利用が第五、第六条、間を空けて第九、第十条にあることを、新たに言及したい。右の二重傍線部が『通俗醉菩提全伝』からの翻案、そして太字が『通俗孝肅伝』と『通俗醉菩提全伝』とで共通する箇所である。「宣教秀玉雙憐花」の梗概を左に記す。

王宣教は、隣家の陶秀玉と恋に落ち、懇意にしていた雁門の趙寛の協力を得て恋文のやり取りを続け、彼の手引きで密通を交わす。その後、趙寛はならず者の李澤と揉め、後日その逆恨みから襲撃を受けて返り討ちにするも、人を殺めたことで街から離れることになる。趙寛の協力が無くなって互いに会えなくなった二人は、文鎮に手紙を結び付けてやり取りを続け、共に入水して心中を図る。二人の亡骸が両家の者に揚げられ、その死を嘆く所に、道濟が現れ、香を焚いて二人を蘇生させる。その後、二人は結ばれることになる。

『安積沼』の狭布里の話では、「宣教秀玉雙憐花」の前半部から、密通のやりとりと、ならず者から襲撃を受ける展開が用いられている。該当箇所を引用する。<sup>(6)</sup>

① 男女の密通の場面

はや暁にちかかりければ、波門驚て別出なんとす。お秋袂をひかへて「おもひあまり 身はほけれども 細布の むねあひがたき 恋ぞくるしき」とよみてかこちければ、波門も一絶を吟じて別れをしむ

偏憂合歓夕 頓有別離時 自嗟還自慰 不是遠別離

お秋これを聞てよろこび（中略）互に志の深きこと、山盟海誓て、水もるまじくぞ見えにける。かくて時々期を約して、忍び遇こと、己に半年

『復讐奇談 安積沼』第五条

暁ニ及テ別去ントスルニ、秀玉袂ヲ扣ナガラ一詩ヲ吟メ曰「月上郎来處 月傾郎去時 願為天上月 来去不相離」宣教之ヲ聞テ則和シテ曰

偏憂合歓夕 頓有別離時 自嗟還自慰 不是遠別離

カ、リシ後ハ互ニ志ノ深ク山盟海誓、到ラザルコトナク、時々期ヲ約メ忍通フコト二三月

『通俗醉菩提全伝』五上「宣教秀玉雙憐花」

② ならず者の襲撃を返り討ちにする場面

波門何の心もなく、一ツの橋を過ける所に、号笛とおぼしく一声きこえけるが忽竹林のかげ枯葦の裏、こ、かしこより六七人の男大腰

刀をおびてあらはれいで、波門を真中にひきつゝ、み、一言の問答にもおよばず、前後よりとりつきて、無二無三にとらへんとす。波門はおもひかけざる事なれども、大丈夫の魂なれば少しも動ぜず（中略）身を撚り脚を飛せて、一人を橋の上に踢倒し、又一人をとらへ勢につきて投たりければ、思ひかけずも欄干をうちこし、川に撞とうちこみぬ。此うち頭とおほしき大男、波門が眼あきらかに手快を見て、手どりにせんはかのふまじと、刀を抜てかゝりしかば、其余の者も面々に刀をふるひてむかひたり。波門月の光りにて大男が面を見るに、此者は彼藤六なりければ、大によば、りていはく

『復讐奇談 安積沼』第六条

趙寛何心ナク、只一人傘ヲ杖トメ静ニ石岩橋ニ掛ケル時、李澤ソレト見テケレバ、相圖ノ短笛ヲ取テ吹ク一声、忽両方ノ橋端、其外湖岸ノ蘆葦中ヨリ思々ニ走出テ、趙寛ヲ真中ニ引包、一言ノ問答ニモ及バズ、前後左右ヨリ抓付テ引倒トス。趙寛思掛ナキコトナレトモ少モ動ゼズ。狼腰ヲ撚テ取付タル者ヲ橋上ニ打轉セ、左右ノ手ニスガリタル敵ヲ引寄ク力ニ任せ投タリケレバ、思ズ知ズ欄干ヲ打越テ湖水ニ撞ト打込ダリ。李澤之ヲ見テ迎モ力業ニテハ叶ジト思ヒ、劍ヲ抜テ走カ、リシカバ、残シ者共モ面々ニ劍ヲ振テ一斉ニ切テカ、ル。趙寛月明ニ李澤ナリト見定ケレバ、大ニ吼一声

『通俗醉菩提全伝』五上「宣教秀玉雙憐花」

このように、両者には傍線部で引いた箇所<sup>1</sup>の文言、そして話の展開に明確な利用の痕が見られる。

『通俗孝肅伝』と『通俗醉菩提全伝』の話とでは、隣家の女性と恋に落ちること、逢瀬を重ねること、そして文鎖を用いた手紙のやり取りといった共通点がある。京伝はそこに着目し、両者を付会させることで「狭布里」の話を作ったのだろう。

更に、「宣教秀玉雙憐花」の後半部、二人が心中して道済によって蘇生させられるまでの話の利用は、『安積沼』の終盤に見ることができさる。

波門は囚われていた許嫁の鬘兒を救い出すが、二人は海に投げ出されてしまい、波門が鬘兒を岸に引き上げたときには既に息絶えていた。そこで、波門はかつて尼僧から受け取った霊香を焚く。

### ③ 鬘兒を蘇生する場面

かつらこをかきあげて、磯ばたにふさしめ、按腹して水を吐せむとし（中略）香炉に火をうつして、かの霊香をたき、死骸の顔にさしつぐれば、奇哉妙哉、馥郁たる香氣鼻中に入るとひとしく、かつらこ忽眼をひらき、只夢のさめたるがごとくに甦醒ておき上り、元氣平日にかはることなし。

『復讐奇談 安積沼』第九、第十条

（道済は）自ラ香ヲ炷テ高声ニ誦メ曰（中略）誦声未終ニ忽堂ニ一

山東京伝の読本における〈通俗本〉の利用と変化（小林）

陣ノ清風颯ト吹起リ、香烟ヲ卷テ斜ニ二人ノ屍ノ鼻ノ中ニ吹入ル、ト見ヘシガ、忽然トメ一度ニ大ニ叫ブ一一声其マ、口中ヨリ水ヲ吐出ス一數斗、須臾ニ目ヲ開テ起上リ

『通俗醉菩提全伝』五上「宣教秀玉雙憐花」

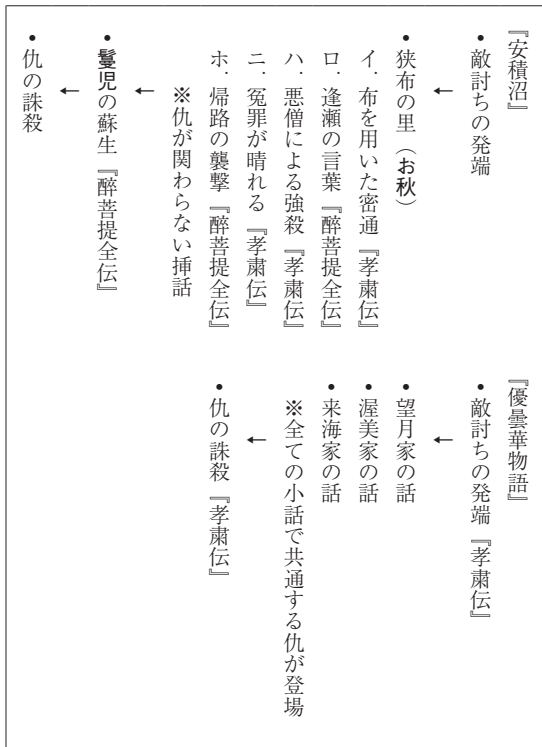
これまで指摘されてきた『通俗孝肅伝』からの利用箇所だけでは分らないが、『通俗醉菩提全伝』からの挿話を踏まえて『安積沼』を捉え直すと、次頁の【図1】から分かるように、〈通俗本〉から小話を取り出して分割し、その間に他の小話を付会させることで、短編の〈通俗本〉の話を、〈読本〉として長編化させようとしていたことが窺える。

これは、『忠臣水滸伝』が浄瑠璃の『仮名手本忠臣蔵』に添わせることで長編構造を獲得したのとは別の方法で、京伝が〈後期読本〉の長編化を試行錯誤した痕跡として見なすことができるだろう。しかし、本作におけるこうした枠組みは中途半端なものに終わり、京伝が〈後期読本〉の長編構造を確立させるのは次作『優曇華物語』となる。その失敗の理由として三つが挙げられる。

第一に、挿話の位置。お秋に関わる場面は作中の中盤であり、物語の長編化を図る枠組みとして用いるには出遅れている。

第二に、登場人物の対応である。「宣教秀玉雙憐花」と『安積沼』における登場人物を対比させると次のようになる。引用①と②の場面では、王宣教・趙寛―山井波門、陶秀玉―お秋、家に忍び込む趙寛―

図1



現西、村のならず者として李澤―藤六がそれぞれ対応している。また、引用③の場面では王宣教・道濟―山井波門、陶秀玉―鬻児、となる。しかし、役割が一部重複していることや、女性が二つの場面で別の人物に割り当てられている等の粗雑が見られる。また、狭布里の話は話の本筋となる敵討ちと関わるものではないため、一つの〈通俗本〉の話が、前半部と後半部での繋がりもなく、別々の独立した挿話となってしまう。

第三に、複数の小話を結び付ける存在の脆弱さである。短編集に近い性質を持つ『通俗孝肅伝』や『通俗醉菩提全伝』では、作中に起こ

る様々な事件を解決する人知を超えた存在「超越者」として、名裁きを下す包公や、法力を用いる道濟がいる。『安積沼』でもそれに倣って、作中の因果因縁を解いて物語を導く了然尼がいるのだが、彼女の登場は主に序盤のごく僅かなものに留まっており、『安積沼』を構成する二つの大筋（一. 山井波門の話）と（二. 小鱈小平次の話）とが殆ど関わり合うことなく進行してしまい、一つの物語として収束し得なかった。

このように、長編構造の確立という点では失敗に終わった『安積沼』であるが、〈通俗本〉の一小話を分割し、間に複数の挿話を盛り込んで長編化を図るという、単なる借用ではない使われ方を試みた一面も窺える。

これらの失敗を踏まえた作品が、三作目の『優曇華物語』だった。前述した全集の中で徳田武氏が指摘しているように、本作の大枠は『通俗孝肅伝』の「石獅子」がもとになっている。この「石獅子」もまた、「宣教秀玉雙憐花」と同様に話が二つに分割して利用されている。村が洪水に襲われ一人の若者を救って養子に迎え入れる前半部、その養子が家に害をもたらし最終的に討たれる後半部である。

【図1】から分かるように、〈通俗本〉からの話の利用が散らかった『安積沼』とは対照的に、『優曇華物語』中における「石獅子」は物語の発端と収束に置かれ、その間に三つの小話が展開し、最終的に「超越者」金鈴道人の導きの下で〈敵討ち〉を主軸とした一つの物語が完結するという、〈後期読本〉に求められていた長編構造が確立された。

以上より、読本の形成期において京伝は、既にある〈通俗本〉の小話を分け、その間に複数の話を肉付けすることで読本の長編化を獲得しようとしていたことが分かる。

### 三、『桜姫全伝 曙草紙』における利用

本作の『通俗醉菩提全伝』からの利用箇所は、先行研究で十分な検証がなされているため、手短に紹介に留める。山口剛氏は、「京傳がこのくだりに『醉菩提傳』を参照したことは極めて明白である。宗雄が櫻姫に贈った詩、翻々雙蛟蝶 時人苑中花 相見撫琴坐 西隣是卓家はまさしく『醉菩提傳』に見るものであつた」と指摘しており、<sup>(7)</sup>該箇所で用いられる漢詩は、「宣教秀玉雙憐花」のものとして一致する。また、長尾直茂氏が指摘するように『曙草紙』の伴宗雄の人物描写には王宣教のそれと同じ文言が使われている。<sup>(8)</sup>

一方で、こうした文言など細部では〈通俗本〉の影響が見られるが、〈通俗本〉を典拠とした挿話の割合が初期作に比べて減少しており、これは次作『昔語 稲妻表紙』（文化三（一八〇六）年）以降も続く。このように、京伝は『優曇華物語』で〈通俗本〉を介して〈後期読本〉の枠組みを確立させた後、主に本朝の典拠を挿話として用いることが多くなる。これは、かつて黄表紙作家であった京伝が意識していたのである。読者層＝一般大衆にとって、〈通俗本〉よりも身近で馴染みのある〈既知〉の典拠を用いてそこに改変を加えることで、読者が知っているはずの話（未知）のものに転じようとした彼の草紙作

家らしい執筆態度に拠ると推察する。<sup>(9)</sup>

このように、読本様式の確立から展開期における京伝読本では、〈通俗本〉から距離を取って作品が執筆されることになる。

### 四、『本朝醉菩提全伝』における利用

その流れの中で、九作目の『本朝醉菩提全伝』は、「醉菩提全伝」の名を冠するように、『通俗醉菩提全伝』に登場する道濟を、一休に仮託した本朝の「醉菩提全伝」として出されたものである。

京伝自身もその「凡例」に、「道濟禪師一代ノ事跡。甚一休和尚ト相似タリ。見ン人合セ考ウベシ」と書き残している。しかし、本作では『通俗醉菩提全伝』からの利用について、先行研究では、山口剛氏が、「本朝醉菩提全伝」巻之一「善悪因果序品」の始まりが『通俗醉菩提全伝』冒頭の翻案であること、そして「たゞ一休を本朝道濟と見る點に於てのみ、その題名の許されるに過ぎなかつた」と述べている。<sup>(10)</sup>

山口氏の指摘する冒頭と注11でふれる一場面の描写には『通俗醉菩提全伝』からの利用が見られるものの、挿話としての利用は管見する限り見られない。<sup>(11)</sup>作中における一休に関する挿話の典拠は、二村文入氏が指摘するように、「一休咄」を始めとした一休説話によるものと思われる。<sup>(12)</sup>

そうすると京伝は、題名に「醉菩提全伝」と冠しているにもかかわらず、『通俗醉菩提全伝』からの直接の翻案を避けているようにも見える。恐らく京伝は、数ある一休説話の中から、『通俗醉菩提全伝』

に収録される話に近いものを選定し、それを〈通俗本〉寄りではなく、本朝の典拠をもとに作中に組み込んだのであろう。

なぜなら、本作はあくまで本朝の「酔菩提全伝」であり、一休に道濟と同じ逸話をなぞらせても意味がない。『通俗酔菩提全伝』の話から丸取りしてしまうと、一人の登場人物の生涯を描く読本ジャンル（一代記もの）としてもぶれる。そのため、京伝は敢えて『通俗酔菩提全伝』ではなく、我が国の一休に関わる説話や謡曲を典拠とすることで、道濟の行状と差別化し、本朝の一休による「酔菩提全伝」として読本化を試みたのだろう。

では、『通俗酔菩提全伝』の話を利用せずに、何を以て「酔菩提全伝」としたのか。それは、高僧が作中で数多く展開される事件の解決を繰り返す物語の〈枠組み〉であると筆者は考える。

しかし、『通俗酔菩提全伝』は、道濟が赴く先で事件に遭遇し、解決していく短編構成になっており、これは長編物語構造が求められる〈後期読本〉には適さない。一方で、『本朝酔菩提全伝』では、道濟同様、一休が作中で起こる複数の事件に関わって解決へと導く展開の共通性が見られるにもかかわらず、作中四つの小話が互いに絡み合う長編構造を有している。

本来なら長編の読本に適さないはずの〈枠組み〉を、京伝はどのようにして自分の読本の中に落とし込んだのだろうか。それは、道濟と一休の人物造形と作中における役割を、【図2】のように比較すると見えてくる。

図2

| 共通点      | 道濟                                                                                                                         | 一休                                                                                                                         |
|----------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 作中での関わり方 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・登場人物らに仏果を与える</li> <li>・一話完結式。各話の繋がりが皆無</li> <li>・濟顛の超常者ぶりに焦点（登場人物らは受動的）</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・登場人物に仏果を与える</li> <li>・各小世界を渡り、登場人物らを導いて結びつける役割を果たす</li> <li>（登場人物らは能動的）</li> </ul> |

この表では、両者は、法力を使う前に酒を嗜み、考えがあつての奇行を取る共通点がある反面、作中の話に対する関わり方では大きく異なっている。それは一休と道濟、つまり物語における「超越者」の立ち位置である。

『通俗酔菩提全伝』の場合は、殆ど話が道濟視点で進む。そして、数々の問題を彼の間隔離れた法力で解決していく話の繰り返しとなっているため、単調な展開の連続とも言える。つまり、道濟が〈主〉となつて事件に当たり、他の登場人物は事件に巻き込まれて受動的に事の流れに身を委ねて解決を待つ〈従〉の関係性になっている。

しかし、『本朝酔菩提全伝』の場合は、一休ではなく、作中で展開される四つの物語世界それぞれの主要人物視点で物語が進行される。その中で、一休は時に正体を伏せながら作中随所で彼らを見守り、解決へと導く裏方に徹しており、物語としては小話の主要人物らが〈主〉



となつて能動的に事件の収束を目指して物語を動かし、一休が彼らの危機を救い、解決への最後の一押しをするという、事件解決における〈副〉の立ち位置に留まっている点で、道済と対照的である。

加えて、『通俗醉菩提全伝』では小話と小話の間に繋がりがあつたところが稀であり、その結果として作りが明快で、多くの話を作中に盛り込む短編集的性格を有することになった。一方で、『本朝醉菩提全伝』では、四つの物語世界の間に相関関係が存在する。そのため、高僧が淡々と登場人物へ仏果を与えるような短編形式にはならず、四つの物語世界が並行して進み、最終的にそれぞれの話が一休を通して結び付けられることで、一つの結末へと収束されることになる。

更に、『通俗醉菩提全伝』には無く、『本朝醉菩提全伝』の長編性を支える存在として、作中全般に登場し、一休同様に四つの物語世界全てに関与する、共通の「悪人」が挙げられる。法力が使える万能性を有し、また善側に位置する一休を物語の随所に登場させて導かせることは、ときにご都合主義的な不自然さを生じる。そのため、一休の登場は物語の要所々に留まっている。これはかつて、散漫な用いられた方であるとして、先行研究では本作の構成を論じる上で批判の対象となつていた。<sup>13)</sup>しかし実際には、四つの話に共通する「悪人」が、一休不在の段で登場して主要人物らへ悪事を働くことで、彼らに行動の動機を与えて物語を進行させる役割を担つていた。このように「超越者」と「悪人」、二つの対となる存在が、物語の導き手として互いに補完し合うことで各物語世界、延いては物語全体が支えられたこと

で、『通俗醉菩提全伝』とは異なり『本朝醉菩提全伝』は長編性を獲得したのである。<sup>14)</sup>

なお、これまで見てきたように、『安積沼』、『曙草紙』、『本朝醉菩提全伝』の全てで共通して利用されているのは、『通俗醉菩提全伝』の一編、「宣教秀玉雙憐花」である。京伝はなぜ、この話を度々用いたのか。長尾氏は、この話が〈通俗本〉の『通俗醉菩提全伝』と、そのもとになつた〈白話小説〉『濟顛大師醉菩提全伝』とで異なる箇所があると中村幸彦氏の論を引く形で、話が「二人の馴れ初めから説き起こされるのに対して、原本にはその挿話がなく、二人が心中したところから話が始まる」と指摘している。その上で、原本の一つに同様の話がある、または通俗物で新たに創作されたものではないかと推論を立てている。<sup>15)</sup>

実際、「宣教秀玉雙憐花」は『通俗醉菩提全伝』の中でも異色の構成を持つ小話である。前掲した【図2】のように、『通俗醉菩提全伝』では、道済の視点で物語が進行し、他の登場人物たちは問題に巻き込まれても解決には乗り出さず、道済に任せるといふ受動的な話の構成を持つ。しかし、「宣教秀玉雙憐花」では、後半部の入水した宣教と秀玉の亡骸を両家の者たちが悼む場面、脈絡もなく唐突に道済が登場し、蘇生をしている。道済が一切関わらない前半部では、宣教と秀玉はそれぞれ能動的に結ばれようと動いている点でも、この話は他とは様相を異とする。

こうした人物の心情をよく描き、人情に訴えるような話の作りは、むしろ浄瑠璃や京伝読本に近いものであった。そのためか、この話は京伝の読本の中で度々使われることになるのである。『通俗醉菩提全伝』、特に「宣教秀玉雙憐花」は彼に与える影響が特に大きい話であったと言えよう。

以上のように、『本朝醉菩提全伝』では一休を取って前面に出さず、それまでの京伝読本と同じく、受難に遇う人々に主眼を当てて物語を進行させる形式を取った。また、観音のような高位の「超越者」は、その万能さ故に、作中の冒頭と結びにしか登場し得なかったが、本作では道済のように俗伝が多い、「人間」と従来の「超越者」の両方の性質を持つ一休を据えた。結果、彼は作中様々な場面で自由に登場することができ、「超越者」となり、一休の行状を描く（一代記もの）として成立した。短編的性格を持つ『通俗醉菩提全伝』を、〈読本〉としての「醉菩提全伝」に昇華させた京伝のこうした技法は、もつと評価されてよいものである。<sup>(16)</sup>

そして、『本朝醉菩提全伝』を経て出された京伝読本の最終作『双蝶記』（文化十（一八二三）年）では、やはり『曙草紙』以降の例にもれず（通俗本）からの挿話が見られない。それに加えて、それまで作中の因果因縁を束ねて大団円へと導くために（読本）の長編構造を支えるのに不可欠であった、人知を超えた物語の導き手「超越者」をも登場させずに、「人」の手によって作中の因果因縁が収束されるこ

とになる。

## 五、終わりに

ここまで、『通俗醉菩提全伝』の利用の見られる三つの京伝読本を取り上げ、その利用形態を追ってきた。〈通俗本〉を下敷きに始まった京伝読本は、小話の利用から、趣向や表現の引用へ、そして〈通俗本〉の枠組みを（読本）に落とし込むに至ったように、その依存の比重を減らしていったことが分かる。

このように、京伝読本の中で用いられる挿話の典拠が、作品を追うごとに漢籍由来のものから本朝のものへと移っていく様子は、読本の確立に大きく寄与した〈通俗本〉から独り立ちして、我が国の新たな文芸様式として確立、熟成されてゆく流れに重ね合わせることができらるだろう。

注1) 山口剛氏や小池藤五郎氏を始め、多くの研究諸氏によつて指摘されており、水野稔氏編『山東京伝全集』（ベリかん社、十五卷一九九四年一月／十六卷一九九七年四月／十七卷二〇〇三年四月）の徳田武氏「解題」に詳しい。また、本稿における『復讐奇談 安積沼』、『本朝醉菩提全伝』の引用は本書に拠る。

(2) 注(1)に同じ。第十五卷の五七四頁参照。

(3) 大高洋司氏「読本善本叢刊 忠臣水滸伝」（和泉書院、一九九八年十月）「解題」四五二頁より引用。

(4) 注(3)に同じ。四五五頁より引用。

(5) 注(1)に同じ。第十五卷の五八三頁より引用。

(6) 本稿における『通俗醉菩提全伝』の引用は、中村幸彦氏編『白話小説 翻訳集 第二巻』（汲古書院、一九八四年九月）に拠る。

(7) 山口剛氏『山口剛著作集 第二』（中央公論社、一九七二年五月）一六四頁より引用。

(8) 長尾直茂氏「山東京伝の中国小説受容 ―「通俗物」の介在を論ず―」京都大学文学部国語学国文学研究室編『國語國文』第六十四巻 第十二号（中央図書出版、一九九五年二月）の四五頁参照。

(9) こうした典拠の利用については、京伝読本五作目『善知安方忠義伝』の〈妖怪もの〉挿絵の典拠と描かれ方にも見ることができ、拙稿「山東京伝『善知安方忠義伝』―挿絵と趣向―」早稲田大学『教育学研究 科紀要（別冊）三〇号―』（二〇二二年九月）にて論じた。

(10) 注(7)に同じ。一八〇、一八七頁を参照。

(11) 山口氏の他にも小池藤五郎氏は『山東京傳の研究』（岩波書店、一九三五年十二月）の四八三頁で、侘助・小田井の戀愛が「宣教秀玉 雙憐花（①）」に、小田井に宿る犬の怨念を祓う話が「濟顛裸治處女癆（②）」から用いられていると指摘している。そして長尾氏が注(8)の四六頁で「地獄心解品第七」の大筋が「通俗醉菩提全伝」巻の二「濟顛雪夜宿娼家（③）」に拠ると述べている。しかし、①の「宣教秀玉雙憐花」と本作の間では人物対応に共通性が乏しい。一方で、野晒悟助がならず者たちを追い払う場面での文言に、本稿でも引いた趙寛と李澤の場面との一致が見られることから、『曙草紙』以降に見られるように、〈通俗本〉の小話ではなく、文言を流用した利用法に該当すると考える。また、②と③も、話の展開が作中と大きく異なるため、一休説話に近似するものとして着目された話ではあるが、本稿でも述べたように直接の典拠として寄せられたのは一休説話である。

(12) 『本朝醉菩提全伝』における一休説話の利用は、二村文人氏「一休説話の系譜」―『本朝醉菩提』をめぐる―（『日本文学 始源から現代へ』笠間書院、一九七八年九月）に詳しい。

(13) 山口氏の注(7)の一八五から一八六頁、小池氏の注(11)の四八六頁を参照。

(14) 拙稿『本朝醉菩提全伝』の再検証―岩芝をめぐる―『近世文藝』

山東京伝の読本における〈通俗本〉の利用と変化（小林）

第一一六号（日本近世文学会、二〇二二年七月）参照。

(15) 注(8)の四四から四五頁を参照。

(16) 『本朝醉菩提全伝』と近い時期の読本に、曲亭馬琴『青砥藤網摸稜案』（葛飾北斎画、前集五巻・後集五巻、文化八、九（一八一―一八一）年刊）がある。この作品は鎌倉時代の青砥藤網を主人公にした裁判小説〈比事もの〉である。その中に〈通俗本〉の『通俗醉菩提全伝』、またはその原典に当たる〈白話小説〉『濟顛大師醉菩提全伝』から取ったものがある。徳田武氏は『青砥藤網摸稜案』と『醉菩提全伝』（『日本古典文学会々報』八十二号、一九八〇年十月）の八頁で指摘している。本作は、前集五巻では各巻で一つの独立した事件が起きて青砥藤網が裁きを下す一話完結式であり、後集は五巻を通して一つの事件を扱っているように、読本としては珍しい構成を取っている。作品の軸となる枠組みは、「青砥藤網による一連の諸問題の解決」であるが、彼の「超越者」としての性質は、次頁の【図3】から分かるように、「通俗孝肅伝」の包公や『通俗醉菩提全伝』の道済に近い。加えて、小話ごとに繋がりがないため、読本の軸となる長編性に欠けており、そのためか前集と後集とで構成を転換したようにも見える。他にも、【図3】からは京伝と馬琴が、各々の読本の中に取り込もうとした挿話の差異を窺うことができる。京伝は、読者（既知）の日本の作品を用いて戲作的な書き方を行い、一休に各小話を結び付けさせることで長編化に成功するものの、話が複雑化して難読となり売れ行きが奮わず続編が未刊となっている。一方の馬琴は、読者になじみの薄い〈未知〉の漢籍由来の典拠を用い、一事件完結で明解な構成にしたものの、長編構造を保てず後集で作風を転換し、続編も未刊となっている。このように、二人は同時期に『通俗醉菩提全伝』を用いた読本で対とも言える成功と失敗を体験しているのだが、こうした比較については、本稿の論旨から外れるため、別の機会に改めて論じたいと思う。

図3

|      |                     |                     |                |                            |       |       |                        |        |           |
|------|---------------------|---------------------|----------------|----------------------------|-------|-------|------------------------|--------|-----------|
| その後  | 典拠                  | 利用                  | 話の繋がり          | 立ち回り                       | 他登場人物 | 超常的な力 | 登場<br>(話の視点)           | 中心人物   |           |
|      |                     |                     | なし。一話完結        | 行く先で起きた問題を法力で解決            | 受動的   | ○     | 全編<br>(濟顛視点)           | 道濟(濟顛) | 『通俗醉菩提全伝』 |
| 後編未刊 | 和書(一休咄、謡曲)<br>↓読者既知 | 枠組みを利用<br>↓《高僧一代記》  | あり。各話の因果を一休が結ぶ | 登場人物による解決の助けが主             | 能動的   | ○     | 全編<br>(各登場人物視点)        | 一休和尚   | 『本朝醉菩提全伝』 |
| 続巻未刊 | 漢籍の裁判小説<br>↓読者未知    | 枠組みが近似。<br>卷之四に類話あり | なし。一事件完結       | 訴えを受けるか、赴いた先で事件に遭遇し、藤綱が裁く。 | 受動的   | ×     | 主に事件発生效后、<br>(各登場人物視点) | 青砥藤綱   | 『青砥藤綱摸稜案』 |